

令和6年度 備前市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和6年12月24日(火) 10:30～

2 場 所 備前市役所 3階会議室

3 出席者

- | | | |
|---------|-------|----------|
| (1) 構成員 | 吉村 武司 | 市 長 |
| | 今脇 誠司 | 教 育 長 |
| | 出井 鉄二 | 教育委員 |
| | 田中 道生 | 教育委員 |
| | 原田 千暁 | 教育委員 |
| (2) 事務局 | 榮 研二 | 企画財政部長 |
| | 行正 英仁 | 企画課長 |
| | 後藤 光喜 | 企画係長 |
| | 福島 茜 | 企画係主事 |
| (3) 関係者 | 畑下 昌代 | 総合教育部長 |
| | 守屋 孝治 | 教育政策監 |
| | 杉田 和也 | 教育総務課長 |
| | 春森 弘晃 | 教育政策課長 |
| | 谷口 健一 | 小中一貫教育課長 |
| | 文田 栄美 | 幼児教育課長 |

4 協議事項

幼少一貫教育、小中一貫教育、幼小中一貫教育及び中高一貫教育の推進について

5 議事内容

○教育政策課長

(資料により説明)

○市 長

新しい教育長が6月に誕生し、3年の任期の間に教育のまち備前がより高いスタンダードを維持できるようにしたいと思っている。

12年前1期目の市長として就任した時に文科省から指導により、これまで教育委員会 は教育委員会、市長部局は市長部局というものが、総合教育会議として市長が議長になり、大きな大綱が示された。

幼小あるいは小中の連携が本当にうまくいっているのか。全国学力テストにおいて、平均点以下であるということが連続している。備前市の小6、中3の学力が岡山県の平均以下であることに大変危惧している。

そのためにも、小1ギャップ、中1ギャップをなくしていかないと、そこでつまずいたら、小学校6年間あるいは中学校3年間を楽しい学園生活を送れるのかどうか、そういう点も大変心配している。

岡山県下で平均以下であることが2年連続あることは、何か問題として捉える必要は

あるのかないのか。

なぜこのような結果が生まれてくるのか。それは、小1ギャップがあるからなのか、中1ギャップがあるからなのか。

○小中一貫教育課長

点数の部分ではそのとおりであり、一方、学習状況のアンケート調査では、わからないことを詳しく知りたいことがあった時に自分で学び方を考え工夫することができている、授業で課題解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる、授業やテストで、間違えたところ、理解してないところについてわかるまで先生が教えてくれるということとは、全国の数値よりも高い傾向が出ている。

子どもたちの意欲、態度は、学習へ向かうということが今できていると感じている。先生と子どもたちの信頼関係は築けているのではないか。

それを点数に結実させるような、学力に結びつける取組ということで、今の信頼関係の上に、授業改善及び家庭学習等での徹底といったところも上積みが必要であると思う。

○市 長

その原因は小学校1年に上がった時の子ども学力、6年になるまでの学力、このあたりが平均以上になったり、平均以下になったり、いろいろな動きはあると思うが、校長以下先生が一生懸命教えていると思うが、なぜ4年連続平均以下になるのか。

子どもを持つ親として、あるいは本人の子どももそうだが、やはり努力している。平均点が上がっていくのは仕方がないと、みんな努力している。

何か抜本的なもの、これだけ教育予算をつけて教育環境を充実させているにも関わらず、小学校1年生の時からをつまずきがあるのか。それが5年間では小6になった時に追いついていかない、平均以下である。そのまま中1になって、中3の時にまた岡山県下で平均以下なる。

○小中一貫教育課長

より徹底を図るという意味では、家庭学習も1つの課題になる。例えば、家に帰ってからのメディアとの付き合いが、学習状況調査を見ると、メディアと関わる時間が全国よりも高いことが市の子どもの傾向としてあり、小中間の取組でも、メディアコントロール、PTA活動でもメディアとの付き合い方は研鑽しながら、少しでも改善につながることを目指している。

○市 長

例えば、家に帰って勉強する時間が短ければ、三者面談で2時間は確保してくださいなど、具体的に学校と保護者の通信のようなものでチェックできないのか。

○小中一貫教育課長

例えば、中学校は帰りの会に帰ってから自分が何時から何時まで家庭学習する、何時

までは自由な時間にすることなど、家庭学習では何の教科を何分することの計画を立てて家に帰る。実際に取り組んでの振り返りを先生と次の日、生活ノートを通じて交流する機会は持っている。

ただ、保護者と毎日のやり取りになると、そこまできていない。学校と家庭の連絡は見直す必要がある。

○市 長

社会に出ても学校に上がっても評価される。評価されることで、例えば給料が上がったり、グループのリーダーになったり、生き甲斐とかいろいろなものを身につけていく。

社会に出た時に平均以上の知識や学力、あるいは文化力とかスポーツ力があるに越したことがない。

小1に上がる時すでに何らかのハンディキャップがあるのであれば、5歳児の教育についても小1並みの読み書きについて勉強も幼児教育に入れる。

1番心配しているのは放課後教室。両親が働いている皆さんは放課後教室に入れられる方が多い。本当に放課後教室として復習、予習ができているか。ただ子供を預かっているだけに終わっていないか。教育委員会と放課後教室の連携ができているのか。

○総合教育部長

放課後教室で勉強することが学力の向上にも繋がる。

○市 長

放課後教室というのが本当に大きな役割があると思う。子どもは学校が終わってお父さんとお母さんが帰ってくるまでそこで預かる。その時に全然教育と関係ないとはいえない。延長線で家に帰って学習時間があまり取れてないのであれば、なかなか学力が上がらない。

スポーツで一所懸命頑張りたい小学生もいる、中学生もいると思う。バイオリンやピアノをしたい子どももいる。何もかも教科書が万能であると思わない。子どもの才能と両親の理解で子どもが育てばいいと思う。

○教育長

放課後児童クラブでの宿題等は増えていると思う。その充実と、放課後こども教室の内容充実も大事、家庭学習は内容、時間的なメディアとの関係もあり、そこの指導もしっかりしていく必要がある。保護者とのやり取り、あるいは学校で子どもをしっかり見ていくようにする。家庭学習、放課後こども教室、直前の過去問、しっかりやっていけたらと思う。見直しというか、学校長等にも連絡していけたらと思う。

○出井委員

学力調査でランキングが出るのは、共通のテストをみんなやってその結果ならば、傾向と対策で上がることは可能でないか。

○市 長

子どもたちに、少なくとも平均より少し上ぐらいの小6、中3の学力がついている状況で中学に行き、あるいは高校に行くことで新しい環境に馴染みやすい。

親も備前に住んで良かったと思ってもらいたい。結果的には子どもたちの高校進学や大学進学まで繋がってくる。

○出井委員

受験を見据えた節目の試験勉強は、ランクを上げるために勉強することの1つのきっかけになる。そういうことを通じて学力も上がっていく。そのためだけの勉強というの、具体的に手を打つことで子どもたちのモチベーションになっていく気がする。

それだけのためではなくて、そういうプロセスの中で制度があるなら活用していく。具体的な方法は色々あると思う。

○市長

教育委員会が強力なリーダーシップを発揮しない、現場に任せっきりであれば手の打ちようがない。

○小中一貫教育課長

どういう面で切り込みを深くしていくのか、実際に授業を見て不十分な点があるところは指摘を重ねながら、少しずつ取組も前に進むよう取り組んでいる。

○市 長

6年生になってからでは遅いと思う。小1から1つ1つ積み重ねて、学習時間、放課後教室、トータルで教育をやっていかなければ。

例えば令和3年10月に決めた教育大綱では英語教育に力を入れようとしている。4年経ったが英語力はどれだけついているのか。

子どもの成績が悪い、それは家庭での生活がよくないということで学校に注文を付けないことも多いのではないかと。遠慮せず父兄は学校に注文すればよい。

学校も父兄にお願いすればよい。大事な子どもだから。令和3年に教育大綱に明示しているが伝わっていないのではないかと。

教育大綱に修学前の教育、保育の重視と書いている。幼稚園の5歳児、小1ギャップにならないように小学1年生に送り出すことができるのか。小学校1年の学力が6年まで伸びる子。最初から挫折で伸びない子。幼稚園をこども園にして、0歳から5歳までをその小学校につけようとして、この制度を導入している。

○教育長

教育大綱の中身が、もっと浸透するかたちにしないといけない現実の場にもう一度、今の令和の時代の教育をもう1回描き出す必要があると思う。もう一度検証して、そのような形にする必要があると感じる。

放課後の過ごし方、それから家庭学習、これは大きなキーポイントになると思う。一

時的なものもそうだが、年間通じて平均点を上げるのであれば、真ん中の子に焦点を合わせて授業をすれば平均点は上がる。4年連続でこのような状態が続いている。ギアの停滞、カンフル剤、そのような時期に来ていると思う。このまま甘んじて、そのままというわけにはいかないと思う。そこを突き詰めていく必要があると思う。

○教育政策監

目の前の学力検査の点数だけを上げることを考えれば、恐らく学校現場には過去問をやらせなさい、試験前に1週間はこれに集中してやりなさいとなるが、それでは毎年上位を獲得できる教育にはならないと思った。

秋田県が学校教育を探究型の学習に変えた。先生がいつも黒板の前に立って生徒たちに全てのものを教えるやり方ではなくて、生徒にいかに興味関心を持たせて、やる気を出させて、生徒が自分で課題を見つけて解決していくかという方法、アプローチに変えていった。

人数も人口も減って産業形態も変わってきているから、教育もやっぱり変えないといけない。その1つの方向性が探究型だと思う。そこに備前市がIBを通じて取り組もうとしているのは、絶対やりきらないと表面だけのことで終わってしまう。

もう一つは幼児教育がどうなっているかという問題が大きいと思う。ALTを全部配置して英語耳を作ろうということで全国では珍しい英語の取組をしている。

全国学力検査で別に全ての教科で平均を取らなくても、備前は英語だけはいつもトップだと、それだけでもいいのではないかなと。そこを最大の備前の教育の売りにしていくことが、私ならそこを徹底してやりたい。園長、校長先生にも備前の方向性をしっかり理解してもらい、ここの部分は協力してくださいという形で指導していく。

○市 長

市内中学校のロサンゼルスに行った5人の子どもと面談をしたが、本当に英語を勉強しておけばよかった、これから勉強しますと言っていた。実際に自分の中学時代の英語は通用しなかった。その体験をするという自主的なことが必要と思う。

公費を使ってもチャレンジさせてあげて、常に自分のレベルを相対的に分かるようにしてあげることも必要と思う。

○小中一貫教育課長

子どもたちと先生が一緒になって、今日の課題はなんだろう、どのようなアプローチで解決に向かっていくかを意識した授業は取り組みが徐々に進んできているが、発展途上である。子どもが自ら学ぼうとする力、学び方を学校で子どもが身につくような取組を進めれば、家に帰っても子どもたちが課題に向き合うところも自主的に進んでいくと思う。

○教育長

教育委員会は現場へ足を運ぶ。チェックしなければダメなところがあるのであれば。授業を見ていていい授業は伝わってくる、他のクラスも全部できているのか、視察した

授業だけでいいのか。そこをチェックする必要があるのではないか。常に日頃から全てチェックしていく必要がある気がする。最終的には学力が全てでない。子供の感受力を養うことが計画に繋がってくると思う。そこをしっかりと詰めたような授業の仕方、カリキュラムを回していく。

○市 長

校長等を公募型で全国募集したらどうか。

○教育長

県が動いて公募するのか、備前市が市費を持って公募するのかはあるが、備前市の教育に賛同を持ってくれる各校のリーダーを募れるのであれば、それは変わっていく。市立（いちりつ）の学校というのは、そのような競争がなくて、横並びの連携の中で、護送船団方式である。そこに、凸凹は逆でない。前のめりにパワーを出していく意識をかき立てるような学校経営がいるのではないかとも思う。みんな一緒によいというのはあるが、特色を出しつつ、地域と連携しているところがある。備前の教育に魅力を感じて、関心を持って賛同してこられる人が増えていけば、そのような風潮はなくなっていくのではないかと思う。

○田中委員

校長と昔話したが学校には学校のコミュニティがあるらしい。だからあまり踏み込めない。語弊があるが、先生は学校現場しか知らないというような感じがあるので、センセーショナルなことをやっていただければ変わるのではないか。

I B教育を十分進めていってもらいたい、地域の皆さんと一緒にやるようにしてもらったら、変わっていくということで十分支援いただけると思う。

○原田委員

教育は人づくりということで時間がかかると思うが、探求型で変わったことが何年かかったのかということが少し疑問に思う。

現状、備前市が4年も平均以下だということは、時間がかかりすぎているかもしれないが。現場の授業を見させていただく機会では、先生はしっかり子どもの探求心を支えていく授業をされている。国も主体性の育ちを謳っているので、どの学校も主軸はそれを養おうと思っているのではないかと思う。

現場は学力の平均点、試験の平均点を指標に置いていないのではないか。就学前教育も人づくりである。主体性を重んじて資質、能力を養うように今、教育している。

現実、教諭の資質がどうかということもある。まだまだ勉強しなくてはというところもあるが、主はそこに向かって現場の保育は頑張っている。

幼児教育は点数ではない。1年生に入って初めて学力というテストの指標になって、そこが見えないので小学校教育、義務教育のところを、どこを目指していいのか、どう伝えて接続していけばいいのかが今は問題。明らかに先生たちに見えていないところもあるかもしれない。

そこを接続カリキュラムで繋いでいるところかもしれない。まだまだ勉強しなくてはならないが、人づくりを今先生たちは重んじていて、点数というところもあるけれど、家庭との連携、それから放課後との連携っていうところに少し甘さがあるのかもしれない。I B教育も進められているとは思いますが、教育委員会と現場と、また児童生徒の実態とうまく繋がっているのかどうかというところは少し不安なところがあると思う。

ただ突っ走って、現場の先生がうまくそのI B教育を進められていくかは、疑問があるかなと思う。もう少し歩み寄ることは備前市の教育にとっては必要なこととして大いにあると思う。

○出井委員

難しい問題である。何が1番肝心なのか。人間力。人間力の中に学力というのは当然あるわけで、特に言われているのは理数教育。数的能力も含めて学力をつけてあげることが大事である。学力テストも1つのモチベーションにはなるので、互いに連携してやっていくこと。

○市 長

備前市は教育の町を標榜し、子どもたちに学校へ行きたい、そして学びたいこととして県内でも最も優れた教育環境を作ろうとしている。そのためにも幼少、小中、幼少中あるいは高校との連携、接続を考えると中高ということを、市長部局と教育委員会が一緒になって、子どもたちはストップしないので、義務教育だから1つ1つ上がっていくので、子どもたちにとっても備前に生まれてよかった、育って良かったという、接続を幼稚園から高校まで頑張ってやっていきたいと思う。

(以 上)